

2 次代を担う青少年の自立に向けた健全育成事業

(1) モデル的事业 (特色あるプログラム・実践研究事业)

令和4年度教育事業

「アクティブ・ジオキャンプ2022」



【期日】令和4年7月24日(日)～8月6日(土)
13泊14日

【場所】国立磐梯青少年交流の家

○共催・後援・協賛

共 催：磐梯山ジオパーク協議会

後 援：福島県教育委員会、猪苗代町教育委員会、北塩原村教育委員会、磐梯町教育委員会、日本ジオパークネットワーク

協 賛：株式会社エイティズ、株式会社ツルハホールディングス、株式会社リオン・ドールコーポレーション、株式会社Roots (順不同)

○事業趣旨

子供たちの健やかな成長に必要な強い心と体を育てるために、「食育」と「運動習慣づくり」から健康的な生活習慣のきっかけづくりを行う。磐梯朝日国立公園を中心とした立地条件を生かした冒険的な活動を通じて、仲間と協働して困難を乗り越えるために技術や精神を培い、達成感を味わいながら、長期キャンプの魅力を経験する。

○活動日程

	期日	内容	特色
ジオ チャレンジ	7月24日(日) 7月25日(月)	・磐梯山ジオパークについての 講話、実験 ・裏磐梯火口探検	磐梯山ジオパークについての学習、体験活動。
ばんだい チャレンジ	7月26日(火)～ 8月2日(火)	・登山体験 ・シャワークライミング体験 ・サイクリング ・カヌー体験 ・食育講座 ・収穫体験と収穫した作物を使った調理活動	磐梯山・雄国沼登山。 小野川不動滝でシャワークライミング体験。 桧原湖でカヌーや湖水浴。 大学の先生の食育講座。 磐梯山周辺で育てた農作物の収穫体験と調理活動。
猪苗代湖 チャレンジ	8月3日(水)～ 8月6日(土)	・猪苗代湖一周 ・まとめ、発表会	2日間で猪苗代湖一周。 活動全体を通した振り返り。

○参加者・概要

参加者：小学生(男子9名、女子5名)

中学生(男子3名、女子2名)計19名

概 要：ジオチャレンジ【アイスブレイク・目標設定】

出会いの会の後はスタッフによるアイスブレイクを行った。参加者ははじめ緊張した面持ちや堅苦しい雰囲気であったが、ボランティアの声かけやミニゲームで気持ちの緊張を解していった。その後のテントや食事用チェア設置、釜炊きご飯の夕食作りなどを通して、参加者は次第に表情が明るくなり、たくさんの笑顔が見られるようになった。また、参加者は大塚製菓の熱中症対策についての学習や、登山用のトレッキングシューズのサイズ合わせなども行った。その後、参加者はアクティブ・ジオキャンプ2022(以降：AGC)期間中の個人目標や活動班の目標設定を行い、「仲間と協力し合う。」「最後まであきらめずに頑張る。」など、長期キャンプに対する高い意欲が感じられた。

【磐梯山噴火・ジオパークについての講話、磐梯山ジオラマ作り】

磐梯山噴火記念館長佐藤公氏より、炭酸飲料を使用した噴火の様子再現や、水槽を使っての噴煙の広がり方に関する模擬実験、磐梯山ジオパーク協議会の協力による磐梯山のジオラマ作りなどを行った。火山に関する話だけでなく、昨年起きた海底火山による軽石の拡散や、昨今の台風や大雨による自然災害についても解説いただいた。振り返りでは「岩なだれの発生を知ることができた。」や、「磐梯山の歴史を知ることができた。」などの感想が参加者からあがった。翌日以降の活動に向けての関心や意欲を高めることができた。





○ジオチャレンジ【噴火口探検と五色沼散策】

磐梯山ジオパークガイドの方から解説をいただきながら、噴火でできた磐梯山噴火口や銅沼、五色沼周辺を散策した。ガイドの方の話から噴火により「岩屑なだれ」が起こり、「流れ山」や桧原湖・小野川湖などの堰き止め湖ができたことを知ると、自然の力の大きさを実感する様子が見られた。前日の講話で聞いた、噴火がもたらす威力や目の前に広がる風景、光の加減や流入する鉱水の働きで発色する湖沼群など、美しさという自然の持つ力を改めて感じていた。疲れた様子が見られた参加者もいたが、振り返りでは、「昨日学習した磐梯山の歴史を思い出した。」「噴火による迫力ある磐梯山を見られた。」「綺麗な色の五色沼を見て驚いた。」との感想をもつことができた。



○ばんだいチャレンジ【サイクリング】

福島県サイクリング協会の方々を講師にお招きし、サイクリング教室を行った。参加者は翌日から始まる農家までのサイクリングに必要な知識を得ることができ、安全に活動できるよう真剣に説明を聞いていた。また、起床から朝の集いまでの「おはようサイクリング」の時間には、サイクリング協会の方に監修して頂いたAGCライセンストライに向けて練習する参加者の姿も見られた。AGCライセンストライとは猪苗代湖一周のサイクリングに必要な自転車の乗車技能が備わっているか確認するもので、2回ある休息日に実施した。参加者は提示されたジグザグ走法やブレーキテスト等をパスして、猪苗代湖一周に向けて準備を整えた。



ばんだいチャレンジサイクリング編のスマールステップ1として、猪苗代町内の農家まで片道10kmのサイクリングをした。参加者は公道での自転車乗車はしたことがあるものの、5km以上の乗車に関しては初めてと答えるものが少なくはなかった。また、「おはようサイクリング」では平坦な場所での練習であったが、勾配のある交流の家の駐車場での練習の際には、ブレーキのタイミングや前走の自転車との距離感覚がつかめず接触することもあった。しかし、参加者はサイクリングのたびに自分が乗る自転車の車体感覚をつかみ、交差点や信号での確認などを丁寧に行うなどして、平坦な道10kmを1時間以上かけてサイクリングした。

スマールステップ2として、磐梯町内の農家までの全行程30km・標高差400mの道のりをサイクリングした。往路のサイクリングの途中は下り坂が連続して、先導する職員がブレーキを掛けながらスピードを落とし、15kmを1時間程度でサイクリングできた。復路は殆どが上り坂であり、途中休憩と昼食を挟んで合計5km程度の坂道を自転車を押して歩いた。スタッフから参加者に、「坂道を登り切ったら休憩するよ。」「行動食をとるから、飲み物を配るので10分間の休憩。」「登り切ったら協賛してくれたお店の昼食と冷たい飲み物が待っているよ。」などと言葉を掛けて励まし続けた。前日夜の参加者ミーティングの際に、磐梯町の農家まで往復は猪苗代湖一周サイクリングの試金石という意識付けを行ったこともあり、3時間以上をかけて走破することができた。「もう上り坂の坂道は行きたくない。」「上り坂の坂道が長すぎる。」といった否定的な意見も多かったが、「頑張れた。」「猪苗代湖一周大丈夫ですか？」等と走破できたことを肯定的に捉え、自信につながる発言をしている参加者も少なくなかった。

スマールステップ2として、磐梯町内の農家までの全行程30km・標高差400mの道のりをサイクリングした。往路のサイクリングの途中は下り坂が連続して、先導する職員がブレーキを掛けながらスピードを落とし、15kmを1時間程度でサイクリングできた。復路は殆どが上り坂であり、途中休憩と昼食を挟んで合計5km程度の坂道を自転車を押して歩いた。スタッフから参加者に、「坂道を登り切ったら休憩するよ。」「行動食をとるから、飲み物を配るので10分間の休憩。」「登り切ったら協賛してくれたお店の昼食と冷たい飲み物が待っているよ。」などと言葉を掛けて励まし続けた。前日夜の参加者ミーティングの際に、磐梯町の農家まで往復は猪苗代湖一周サイクリングの試金石という意識付けを行ったこともあり、3時間以上をかけて走破することができた。「もう上り坂の坂道は行きたくない。」「上り坂の坂道が長すぎる。」といった否定的な意見も多かったが、「頑張れた。」「猪苗代湖一周大丈夫ですか？」等と走破できたことを肯定的に捉え、自信につながる発言をしている参加者も少なくなかった。

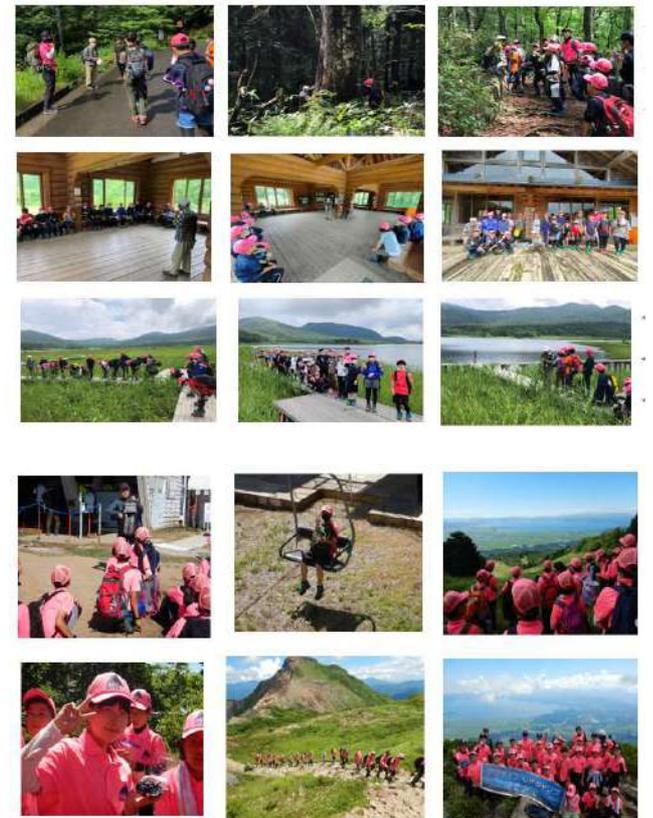


〇ばんだいチャレンジ【登山】

ばんだいチャレンジ登山編のスマールステップ1として、7月25日に行った噴火口探検と五色沼散策は、初めての登山である参加者も少なくなかった。登山の前に行ったセーフティトークで水分の取り方等について伝達したが、折からの気温の上昇により水分摂取が進んでしまい、配布した2本のペットボトルを昼食時には飲み切ってしまう参加者も見られた。その際には職員が持参した水分を分け与えることで対応した。登山に対しては、勾配のある裏磐梯スキー場を登ったり、銅沼や噴火口までの日陰のぬかるんだ道を歩いたりしたが、指導員の話聞きながら隊列を崩さずに登山することができた。また、磐梯山が白煙をあげている所を写真を使って説明を聞いたり、桧原湖の湖畔には現在も温泉が自噴しているところを見たりして、磐梯山が今だに活動している火山であることを知ることができた。五色沼散策では、色の変化に富んだ五色沼湖沼群の様子に興味をもって散策する様子も見られた。

スマールステップ2では、研修指導員のガイドの説明を聞きながら雄国沼を目指して登山した。雄国沼は標高1000mを超える高所に位置しており、磐梯山とは違った火山地形を観察することができるスポットである。今回利用した雄子沢コースはブナ林を進む登山道となっており、「ブナ太郎」と呼ばれている巨大なブナの胸高直径を計測したり、地面に落ちている葉や実など観察しながら歩いたりした。また、森のビンゴカードを配付し、いろいろな植物を探しながら登山することができた。ガイドの方から雄国沼の形成の仕組みや猫魔岳やトランボウという生き物の伝説などのレクチャーを受け、参加者は真剣に聞き入っていた。参加者からは「初めてブナの実を見た！」や「雄国沼は昔から人々に利用されていることを学ぶことが出来た。」などといった感想があげられていた。

スマールステップ3として、磐梯山登山を行った。登山開始場所である猪苗代スキー場のリフト乗り場では、研修指導員の方から、リフト乗車の際の乗車姿勢や登山での歩く際の装備や、注意点などを中心にセーフティトークをしていただいた。登山を通じて参加者に登山活動への意欲を高めたり、安全管理の意識づけをしたりすることができた。登山当日は日差しが強く暑い中での活動であったが、参加者自身が作った冷凍ブルーベリーやきゅうりの浅漬を食べながら、班の仲間同士で声を掛け合い登山することができた。参加者からは疲れた様子も見られたが、眼下に広がる猪苗代湖や那須連山を見ながら無事に登頂することができた。磐梯山の頂上からは猪苗代湖が一望でき、参加者は感動と達成感に満ちた表情をしていた。下山の際は八方台ルートを通して裏磐梯側へ下山し、そのまま桧原湖沿いにある松原キャンプ場へ宿泊した。振り返りでは、「磐梯山は、表と裏で見える景色の違いが見てわかった。」「自分が(磐梯山の)頂上まで登ったとは思えない。びっくり。」など、自然体験を通じて様々な発見をした参加者が多く見られた。





〇ばんだいチャレンジ【シャワークライミング・カヌー・湖水浴】

シャワークライミングは長期キャンプの最初の水辺の活動ということで、参加者に水の事故やけがなどの危険を伴うことをしっかりと認識させ、準備運動を行った。また、ライフジャケットやヘルメット、アクアシューズなどの正しい装着の方法を指導し、2名でバディを組んで注意喚起と人数確認をしながら活動を開始した。活動の際には、指導者は常に無線で連絡を取り合い、ボランティアと指導者で参加者を挟むようにして活動させた。参加者は仲間に水の流れが速いことを言葉や身振りで伝えたり、手を差し伸べて助け合ったりするなどお互いに安全に気をつけてシャワークライミングに参加する姿が見られた。沢を登り切ったところで滝が現れると「険しい道を歩き切ることができてよかった。」「登り切って嬉しい。」と感想を述べていた。また、「班の仲間と協力して沢を登り切れてよかった。」「流れが速いところがあったけど仲間から声を掛けてもらって頑張れた。」など、達成感を味わった様子を多数の参加者の振り返りからも伺えた。

カヌーと湖水浴は松原キャンプ場を拠点に桧原湖で行い、午前中はカヌーと湖水浴を参加者全員で体験した。カヌーでは、参加者はカヌーのオリンピック出場経験のある松原キャンプ場のオーナーから、セーフティトークと併せて、パドルの動かし方やカヌーに座る位置、ライフジャケットやヘルメットのかぶり方などのレクチャーを頂いた。参加者は2人1組のバディを組み、波に煽られながらも頑張って漕ぐ姿が見られた。最初はカヌーの操作に苦戦している参加者が多く見られたが、次第に前後の2人で息を合わせ、協力して漕ぐことがポイントだと気づき、声を掛け合いながら上手にカヌーを進められるようになった。

湖水浴では、指導者からターザンロープや滑り台を使う際の注意点や確認事項が参加者に伝えた。参加者は湖面を監視している指導者と確認しながらロープを使って湖に飛び込んでいた。それぞれの活動の終了際に、参加者各自でカヌーと湖水浴の選択することを伝達した。午後はカヌーチャレンジコースと湖水浴コースに別れて活動した。カヌーチャレンジでは、桧原湖を横断して温泉が自噴している場所までカヌーを漕いだ。参加者はカヌーから身を乗り出し、手や足を温泉につけて束の間のリラックスする時間を過ごした。湖水浴コースでは、参加者同士で輪になって浮かび、身体が湖に同化している感触を味わった。振り返りの中でも「バディと声を合わせて前に進めた。」「カヌーを上手にスピードを出すことができた。」などと達成感を味わうとともに、「バディのことを考えて漕ぐスピードを調整した。」「(バディの)座る位置を交換すれば良かった。」などと、相手のことを考えて行動する姿勢が見られた。





〇ばんだいチャレンジ【食育体験】

食育体験では、収穫体験する農家の場所まで自転車を
使って移動した。会津伝統野菜の収穫体験では、サイク
リングの途中の小学校で農家から話を聞いた後で農場に
向かった。農家の方からはこの小学校で育てている小菊
かぼちゃを例にしたお話があり、参加者は、種の採取方
法や育て方等を他の一般に流通している野菜と比較しな
がら学習することができた。その後、農園に移動して余蒔
きゅうりや会津丸茄子等を収穫した。交流の家に戻って
から、郡山女子大学の亀田先生より、ふくしまっ子健康・
体力「自分ノート」を使って、成長期に必要な栄養や昼食
に食べた栄養素について話を聞いた。また亀田先生から
は参加者が自宅で食べていた食事を見直して食べ物の身
体に及ぼす影響について話を伺った。その後、参加者たち
は午前中に農園で収穫してきたきゅうりを使った浅漬を
作ったり、野外炊飯棟に場所を移して夏野菜のパエリアを
調理したりした。参加者自身が収穫してきた夏野菜を使
ったパエリアは、とても美味しく大満足であった。また、浅
漬は翌日の登山の際に水分の補給とカリウムの摂取に
役立てた。この浅漬作りは磐梯山登山の際にも生かさ
れ、参加者自身が収穫して凍らせた冷凍ブルーベリーと共
に、前日の振り返りの時間にボランティアと一緒に調理し
て、登頂する際の行動食として持参することとなった。

事前の参加者の調査においても野菜嫌い傾向、生き物に
触ることに対して抵抗を示す参加者の存在は少なくな
った。参加者は交流の家から15km離れた磐梯町でトマ
トなどを栽培している農家を訪れ、「プチぷよトマト」と
いう野菜臭さを感じさせないトマトを収穫した。「プチぷ
よトマト」とは、一般的なミニトマトよりも皮が薄く、磐
梯山で濾過されたミネラルをたくさん含んだ水が詰り「ぷよっ」とした食感が特徴的
な品種で、参加者からは「皮がつやつやしていてきれい！」や、「思ったよりもす
ごく甘くてびっくりした。」といった感想が聞こえた。その後、参加者は自転車に乗り、
猪苗代町にある緑の村の魚つかみどり池広場に向かった。磐梯山の湧き水の冷たさ
を感じ、魚の泳ぐ速さや動きなどを実感した後、生きている命を頂くことの大切さを学
んだ。参加者は「生き物」から「食べ物」に変わる・変える瞬間を感じると共に、自
ら捕まえたニジマスを食べることで、生き物への感謝や作ってくれた方への感謝、食
に対するありがたさを学び、「いただきます。」という言葉の意味を考えるきっかけとな
ったことを学んだ。また、参加者は猪苗代町内にあるブルーベリー農家でも、ブルー
ベリー収穫体験と共に野菜を使ってピザの制作と食事を行った。農家からは猪苗代
町で農業を始めるに至った経緯や、地元のおいしいものを食べて楽しんでもら
いたいとのお話があった。野菜への思いを伺った参加者は、用意された生地を伸ばし、
農園で育った野菜をトッピングしてピザを作った。自分で作ったピザは市販のピザ
よりも美味しく、口に入れた途端に笑顔になった。さらに、磐梯町教育委員会
のご厚意により、磐梯町の地元素材を使ったジェラートの提供を受けた。これは、
健康的な運動習慣と食育の取組についての本事業を、磐梯町が進める地域の
コミュニティによる学びの機会と捉えていただいた結果といえる。結果的に、
当施設のある磐梯山周辺地域の農産物を使った食事による健康的な食生活の
実現と、生産者の地産地消の推進を図ることができた。





〇猪苗代湖一周チャレンジ【ライド&ウォーク】

今年度は猪苗代湖一周のうち約43kmを自転車、約24kmを歩くことで、仲間と協働して困難を乗り越え、達成感を味わうための活動として実施した。環境省の「長距離自然歩道の歩き方」においても、大人が歩く距離の目安は平坦地で1日20kmとのことから、上記の設定は妥当と考えた。前日のミーティングでは、各グループ・個人で猪苗代湖一周に向けて目標を立てた。各グループともに、「協力」「あきらめない」等の目標を設定した。また、事前に猪苗代湖一周に対して立てていた個人内目標をグループ内で発表した。「困難をポジティブに考える。」「猪苗代湖を一周して、凄い自分になる。」と自分の言葉で伝えることができた。そこで更に個人の目標に対して、グループのメンバーから励ましの言葉をカードに記入して本人に渡した。そこには参加者が10日間のプログラムで見た頑張り、困難に向かう姿勢など、身近で見ていた仲間なりのメッセージが記載してあった。それを見た本人の様子からグループの仲間に対する信頼感、困難を乗り越えようとする気持ちの醸成につながったように見えた。

第12日目は生憎の雨天でのスタートとなったが、参加者にとっては猪苗代湖一周ライセンストライの合格、高低差400m30km走破などでの自信を胸に、頑張る気持ちがみなぎっていた。前記したとおり、福島県サイクリング協会による自転車教室、同協会監修の猪苗代湖一周のためのサイクリングトライ、猪苗代湖一周のための先導と自転車のトラブルサポートカーの配車などの協力を頂いた。途中雨が止んだり雨足が強まったりなど天候が不安定であったが、同協会のサポートにより安心して進むことができた。協賛企業のリオン・ドールコーポレーション様によるお弁当の提供や、ツルハホールディングス様による行動食の提供のサポートもあり予定どおりに進んでいった。郡山少年湖畔の村へ到着した際には、天候も回復し、湖畔に出て夕陽を見ながら猪苗代湖の大きさを実感することができた。テント設営や釜炊きご飯に関しても10日間の作業の成果を発揮して、職員のサポートがなくともスムーズに活動できていた。参加者は自分たちで炊いたご飯にソースかつをのせて、特製ソースかつ井と会津産の夕顔を使ったスープを食べ、翌日のウォーキングに備えて休むことにした。しかし、大雨と落雷のため、テント泊から室内泊へと変更した。参加者は不安な思いを口にすることもあったが、職員は参加者の思いをしっかり受け止め、自然の脅威に対してどう対処すべきか自然に試されていること、不測の事態になった場合の対応の仕方についての説明をした。そして、ニュース番組を参加者と一緒に視聴し、参加者が置かれている状況を把握させ、2022年のAGCでは困難を乗り越えることができたと後日感じることができるようになろうと伝え、身体を休める事を優先するよう伝えた。

第13日目は猪苗代町と郡山市に落雷等の警報が発令されていたため活動を延期し、バスで交流の家に帰り、濡れてしまった物資の整理をした。振り返りで参加者は、猪苗代湖一周に対して諦めない気持ちを持ち続けること、明日に向けての決意を目標にすることなど、参加者それぞれが気持ちを鼓舞している様子が見られた。



事業報告

令和4年度教育事業

「アクティブ・ジオキャンプ2022」



【期日】令和4年7月24日(日)～8月6日(土)
13泊14日

【場 所】国立磐梯青少年交流の家
郡山少年湖畔の村、Roots

〇猪苗代湖一周チャレンジ【ライド&ウォーク】

第14日目は天候も回復し、猪苗代湖一周の残り24kmウォークが再開された。「猪苗代湖一周のリベンジ」と声を上げると、参加者は拳を上げて答えた。湖畔を歩いて湖畔から見える磐梯山や交流の家の位置関係を把握したり、歩道がない場所やトンネル内の歩行についてセーフティークなどを交えて伝達した。参加者は前日までの疲れや足の痛さなどを訴え、友達と声を掛け合いながら、一生懸命前に進む姿が見られた。昨日とは違った青空のもと、猪苗代湖をバックに写真に写る参加者の気持ちは晴れやかであった。

昼食では、地域の野菜を使ったカレーライスを食べ、エネルギーチャージを行い、目の前に広がる磐梯山とゴール地点の交流の家を見ながらゴールを目指した。最後の上り坂で参加者は最後の力を振り絞って、笑顔で仲間たちとゴールすることができた。グループのメンバーで肩を掛け合ったり、手をつないだりして猪苗代湖を一周できた喜びを表現しながらゴールした。参加者たちはゴールできたことを全員で喜び合い、その様子からは充実感と達成感が溢れていた。

振り返りや14日間の思いを寄せ書きに記入する際には、「猪苗代湖一周は達成感があった。」や、「みんなでゴールして感動した。」などの声や記述があった。

〇発表会・スライド上映・AGC修了証書授与

最終日、参加者は14日間使用したテントや調理器具を片付けた。その後AGCで学んだことや達成できたこと、今後に活かしていきたいことなどについて発表を行った。「達成することで得られた充実感があった。」や「この経験を活かしていきたい。」など、参加者の多くが今後の生活に活かしていこうという意欲を発表していた。次にAGCの活動を写真と動画で振り返る上映会を行った。この会には保護者の方にも出席していただき、14日間という長期キャンプで困難な活動を乗り越えたことや楽しかったことなど、参加者の表情を見ながら成長していく様子を感じてとっていただいた。別れの会では所長から一人一人に修了証書を授与した。参加者の表情からは14日間の活動をやり切ったという達成感や充実感が感じられた。また、参加者からは、様々な思い出を振り返っている様子と長期キャンプが終わってしまう寂しさや友達との別れを惜しむ様子が見られたが、今後に向けての決意を表すたのもしい様子も見られた。



事業報告

令和4年度教育事業

「アクティブ・ジオキャンプ2022」



【期日】令和4年7月24日(日)～8月6日(土)
13泊14日

【場 所】国立磐梯青少年交流の家

○事業アンケートより 「アクティブ・ジオキャンプ2022」について(参加者 計19人)

①全体的にこのキャンプはどうでしたか。

とても楽しかった	楽しかった	あまり楽しくなかった	楽しくなかった
17	2	0	0

②いろいろなプログラムの活動はどうでしたか。

とてもよい	よい	あまりよくない	よくない
17	2	0	0

③交流の家の人はどうでしたか。

とてもよい	よい	あまりよくない	よくない
17	2	0	0

④ボランティアのお兄さん・お姉さんはどうでしたか。

とてもよい	よい	あまりよくない	よくない
17	2	0	0

⑤このキャンプに来てよかったですか。

とてもよかったです	よかったです	あまりよかったです	よくなかった
15	4	0	0

⑥またこんなキャンプがあれば参加したいですか。

ぜひ参加したい	参加したい	あまり参加したくない	参加したくない
15	4	0	0

- ・楽しかった、人間関係を深められた。
- ・いろいろなプログラムがあって楽しかった。
- ・ご飯を作るのが楽しかった。
- ・友達がたくさんできて、とても楽しかった。



○成果(◎)と課題(●)

- ◎ 参加者の満足度は高く、本事業に対する評価は高いと言える。
- ◎ 事前の参加者説明会をYouTubeで公開することで、何度も視聴でき、参加者や保護者が持っていくものを準備する際に確認することができた。
- ◎ 参加者は活動量計バンドを着用することで、時間を守って行動することができ、歩数やカロリー計算を見ながら活動している姿が見られた。
- ◎ 今年度はプログラムの中にサイクリングを取り入れたため、事前の調査では自転車乗車に不安を覚えていた。しかし、朝のサイクリング活動の時間も設けたり、走行距離もスモールステップで徐々に伸ばしていったりして参加者のサイクリングに対する自信と技能高めることができた。
- ◎ 食育体験プログラムにおいては、会津の伝統野菜を使って浅漬を作って登山の際の行動食にしたり、野菜の癖の少ない品種で苦手な食べ物を克服したりする姿が見られた。活動の様子や参加者の感想、保護者に参加者のその後の様子を確認すると、キャンプ終了後に食べる量が増えたり、スーパーで野菜を手にとったりする姿が見られたとのことだった。また、釜戸炊きご飯を炊くことを継続して行うことで、家庭でも鍋でお米を炊いたり、釜を買ってご飯を炊きたいと保護者に申し出たり、ご飯を炊くことに自信をもつことができた。
- 今年度は福島県限定の募集で先着順としたため、午前0時に募集開始すると20分で募集人数に達してしまった。翌朝に募集に関する問い合わせが殺到する事態が発生したため、募集に関する再考の余地があると思われる。
- ジョチャレンジが過密日程となってしまった。次年度では分散する日程も考慮して、長期キャンプを考える必要があると思われる。

(2) 課題を抱える青少年の支援事業

令和4年度教育事業

「生活自立支援キャンプ」



全4回にて開催（日程は下記参照）

【参加者】各回による

【場 所】国立磐梯青少年交流の家
及び 周辺市町村

○事業趣旨

ひとり親家庭等、事情のある児童・生徒を対象に自然体験等の活動を通じた「生活・自立」を支援する取り組みを行い、子供たちの自己肯定感の向上や生活習慣の改善等につながる多様な体験を提供し、自立する力を身につけることを目指す。

○活動日程 ※日時・キャンプ名・場所・主な内容の順に記載

- ① 7月2日（土）～3日（日）第1回 わくわくキャンプ（国立磐梯青少年交流の家・会津若松市）

野外炊飯・ナイトハイク・星空観察・白虎隊の歩いた道ハイキング・鶴ヶ城見学

- ② 7月9日（土）第1回 学びチャレンジキャンプ（国立磐梯青少年交流の家・会津若松市）

白虎隊の歩いた道ハイキング・白虎隊の墓見学・鶴ヶ城見学

- ③ 11月26日（土）第2回 学びチャレンジキャンプ（国立磐梯青少年交流の家 敷地内）

創作活動「流紋焼き（手びねり）」・自然遊びゲーム

- ④ 1月15日（日）第2回 わくわくキャンプ（国立磐梯青少年交流の家 敷地内）

中ノ沢こけし絵付け体験・自然遊びゲーム



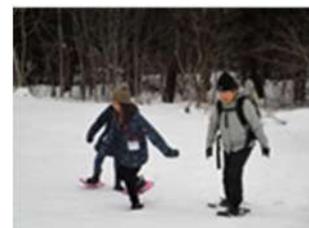
○参加者・概要

参加者：第1回わくわくキャンプ（小学生 男子8名・女子8名 計16名）

第1回学びチャレンジキャンプ（小学生 男子10名・女子6名 計16名）

第2回学びチャレンジキャンプ（小学生 男子2名・女子4名 計6名）

第2回わくわくキャンプ（小学生 男子3名・女子5名 計8名）



概 要：【白虎隊の歩いた道ハイキング】

会津レクリエーション公園から、実際に白虎隊が歩いた道のハイキングを通して、自然に親しみながら活動することができた。飯盛山の山道を歩くのは参加者にとっては大変だったが、最後まで歩き切った後は自信に満ちた表情で見られた。

【中ノ沢こけし作り】

猪苗代町の伝統工芸品である「中ノ沢こけし」を作る体験を通して、こけしが当時の子供たちの人形遊びの代わりだったことや、こけしができるまでの製作の工夫や努力について知ることができた。

【スノーシュー体験】

雪が降らない地域の子供たちへ雪に親しむ活動として設定した。当施設の委託研修指導員を活用することで、楽しく安全に活動を進めることができた。かまくら作りも楽しむことができた。

○成果と課題

<成果>

- ・ 中ノ沢こけし体験については地元の伝統工芸であるので、参加者へ体験していただくことで地元の文化を広めることにつながった。また、新たなプログラム開発への足掛かりとすることができた。
- ・ スノーシュー体験や流紋焼き（手びねり）等、初めての体験プログラムを充実させたことで、昨年度から引き続き同団体参加の事業ではあったが、多くの体験の場を提供できた。

<課題>

- ・ 会津若松市の史跡観光は、子供たちにとっては難しい内容もあった。子供たちが興味をもって楽しみながら参加できるようなプログラムを施設の職員と打合せをして検討すべきであった。

(3) 課題を抱える青少年の支援事業

令和4年度教育事業

「交流キャンプ in Bandai」



【期 日】令和5年1月28日(土)

【場 所】国立磐梯青少年交流の家

○主催

国立磐梯青少年交流の家

○事業趣旨

様々な体験活動を通してコミュニケーション能力を高めることにより、新しく出会う人と良好な関係を築くことができるようにする。また、中学校進学前に交流を図り、お互いを認め合う活動を経験することで、「中1ギャップ」を防ぎ、中学校生活をスムーズにスタートすることができるようにする。



○活動日程

9		10		11		12		13		14		15	
1月28日 (土)	受付	開 会 式	本の紹介・ 読み聞かせ	休 憩	アイス スプレ イク	休 憩	モ ル ク	休 憩	昼 食	移 動 ・ 休 憩	ス ノ ー ラ フ ト ・ ス ノ ー チ ュー ブ ・ そ り 遊 び	移 動	閉 会 式

○参加者・内容・概要

参加者：小学5年生（男子2名、女子3名） 小学6年生（男子0名、女子4名） 計9名

内 容：本の紹介・読み聞かせ、モルック、スノーラフト等

概 要：「本の紹介・読み聞かせ」では絵本専門士の先生を招き、様々な絵本を紹介していただいたり、絵本の読み聞かせをしていただいたりした。参加者はユーモアのある絵本や挿絵が美しい絵本を手にし、たくさんの絵本を知ることができた。読み聞かせでは参加者が一部を音読する場面もあり、絵本の楽しさを体で感じる事ができた。

ニュースポーツの「モルック」の体験では2対2や3対3で対戦を行い、同じ学校や地域でチームを作ったり、違う学校同士でチームを組んだりして、多くの参加者と交流することができた。「ナイス。」「おいしい。」とお互いに声をかけ合いながら、モルックを楽しんでいた。

「スノーラフト」では、スノーモービルが牽引する雪上ボートに乗った。スノーラフトのスピード感やコーナリングの勢いに参加者から歓声が上がった。「スノーチューブ」「そり遊び」では、指示を守って活動することや、止まり方などのセーフティークを活動開始前に行った。ドーナツ型の丸いスノーチューブや三角形のスノーチューブ、普通のそりの3種類を使って、参加者は何度も斜面を滑ることができた。スノーチューブは初めて乗る参加者が多く、施設の備品を役立てることができた。

○成果と課題

<成果>

- 実施後のアンケートで交流キャンプ全体を「とてもよい」と答えた参加者は、全9名中7名（約77%）、「よい」と答えたのは2名と肯定的な回答が多かった。メインの活動となった「本の紹介・読み聞かせ」「モルック」「スノーラフト・スノーチューブ・そり遊び」についても、同様の結果を得ることができた。
- 参加者数が9名と少なかったため、参加者同士がすぐに名前を覚えて交流することができた。所属する小学校は異なるが、進学する中学校が一緒になる参加者は交流キャンプを通してとても仲良くなり、このことを「とても嬉しかった。」と感想に記していた。

<課題>

- 参加者の募集を2回行ったが、なかなか参加者が集まらなかった。本事業の在り方や広報の仕方を検討し、改善していく必要がある。
- 「スノーチューブ」では初めは滑りが悪かったが、次第に良く滑るようになり、想像以上にスピードが出て危険な場面があった。職員の指摘により、スタート地点を下げてスピードが出すぎないように対応した。職員は斜面の状況を随時観察し、活動を安全に実施できるように気を付けなければならないと感じた。

(4) 全国高校生体験活動顕彰制度リエンテーション合宿
 「地域探究プログラム」(学校・団体参加型)
 「オリエンテーション合宿 in ばんだい」



【期 日】 令和4年5月6日(金)
 ~令和5年2月18日(土)
 【場 所】 国立磐梯青少年交流の家
 福島県立猪苗代高等学校
 磐梯山噴火記念館

○共催・後援・協賛・協力

協 力：自衛隊福島地方協力本部会津若松出張所・白河地域事務所
 日本赤十字社福島県支部
 磐梯山噴火記念館
 福島県立博物館

(五十音順にて表記)

○事業趣旨

オリエンテーション合宿を通して、ものごとを探究する姿勢や主体的に取り組む態度、課題に向き合う力等について学ぶ。また、多様な人々と協働しながら地域・社会にある課題解決に向けた地域での実践活動を通して郷土や自然に愛着をもち、新たな価値を創造する高校生を育成する。

○主な活動日程

日 時	内 容	会 場
令和4年5月6日(金)	○ガイダンス ○防災減災についての講話① 「東日本大震災・避難所運営・クロスロードゲーム」	猪苗代高等学校
令和4年5月13日(金)	○講義・演習① 「噴火災害講話・噴火実験」	磐梯山噴火記念館
令和4年6月2日(木) (OR合宿)	○講義・演習② 「ロープワーク・HUG訓練・発表①」	国立磐梯青少年交流の家
令和4年6月3日(金) (OR合宿)	○講義・演習③ 「DIG訓練・野外炊飯・登山の講話」 ○振り返り・発表②	国立磐梯青少年交流の家
令和4年6月17日(金)	○防災振り返り・発表③	猪苗代高等学校
令和4年11月18日(金)～ 令和5年2月10日(金)	○課題解決・行動計画の基礎	猪苗代町内
令和5年2月18日(土)	○発表④・ガイダンス	猪苗代町内



○参加者・内容・概要

参加者：福島県立猪苗代高等学校

1年生（男子11名、女子8名）

2年生（男子9名、女子8名）※OR合宿（6月2日、3日）のみ参加

3年生（男子16名、女子5名）※OR合宿（6月2日、3日）のみ参加

合計 57名 男子36名、女子21名

内 容：震災講話・クロスロードゲーム・噴火災害講話・噴火実験

ロープワーク・非常用テント設営・救助訓練・HUG訓練・DIG訓練

野外炊飯・登山講話・ラベルワーク・発表活動

概 要： 福島県立猪苗代高等学校の全校生徒を対象に防災・減災に関わる合宿を行った。1年生は5月から東日本大震災や避難所運営、磐梯山噴火における災害の特徴や対策を学んできた。答えは1つではなく、意思決定が困難な場面も課題として設定し、様々な意見を出し合い、解決策を模索する学習にも取り組んだ。

OR合宿には猪苗代高校の全校生徒が参加した。1日目はロープワーク・HUG訓練を中心に活動した。自衛隊の方から数種類のロープワークを教わり、それぞれの結び方の特性を知った。学んだロープワークを課題の解決（救助訓練、非常用のテント設営など）に生かすべく、グループで方法を模索して実践した。HUG訓練では避難所を運営する立場となって、避難者への場所の割り振りや指示を出すなどの疑似体験をした。2日目はDIG訓練と登山の講話を中心に活動した。登山時の心構えや装備、今後の活動等について考えた。DIG訓練では猪苗代町のハザードマップを用いて学習した。災害時には猪苗代町の多くの場所で避難することが必要なこと、安全な場所が少ないことを実感し、どのように避難するかを考えた。

○成果と課題

<成果>

- ・様々な講師の方から講話や演習の指導をいただいたことで、避難所運営や災害時の行動について考えを深めることができた。
- ・上級生が下級生を助け、手本となる場面が多くあった。
- ・学校では経験しない活動だったが、積極的に話し合う姿や学び合う姿勢が見られた。

<課題>

- ・HUG訓練やDIG訓練では活動時間が長くなり、一部集中力を欠いてしまう生徒が見られた。
- ・班員の人数が多い場面では役割が減り、活動に消極的になる様子が見られた。
- ・生徒や学校の実態を踏まえてグループ分けや計画を考える必要がある。



(5) 全国高校生体験活動顕彰制度リエンテーション合宿

令和4年度教育事業

「高校生ふるさと探究プロジェクト」

(個別参加型)



令和4年7月16日(土)～7月18日(月)

【参加者】高校生21名

【場所】国立磐梯青少年交流の家
天鏡閣・ホテルみなとや・天神浜
ゲストハウス「ハンボック」

○共催・後援・協賛

後援：福島県教育委員会、猪苗代町教育委員会

○事業趣旨

- (1) 参加者が地域づくりや地域の課題解決などに関する体験(活動)をすることにより、課題発見・問題解決能力を高めることができるようにする。
- (2) 参加者が自身の実践活動の成果や成長を振り返ったり、参加者同士で意見を出し合ったりすることにより、地域の新たな課題や魅力に気づき、未来のふるさとを活性化させる資質を養うことができるようにする。

○活動日程

	日時	科目等	内容(例)	実施会場 (宿泊施設)
参入	7月16日(土) 10:30～20:30	① ガイダンス ② 講話等 ③ フィールドワーク1 ④ 講義・演習1 ⑤ 講義・演習2	○スタッフによる概要説明 ○猪苗代湖の環境を守る取り組みの体験(ヒシ狩り) ○「地域を良くする」観点の整理 ○フィールドワーク(7/17)の計画策定	国立磐梯青少年交流の家 猪苗代湖
実践	7月17日(日) 9:00～20:30	⑥ フィールドワーク2 ⑦ 講義・演習3 ⑧ 発表1	○3観点で班別フィールドワーク 田町おこし(白鳥丸)、天鏡閣(観光)、ヒシの実(再利用)等 ○「地域を良くする」ための有効な活動の検討 ○ポスターセッションによる発表会	国立磐梯青少年交流の家 周辺市町村
取組	7月18日(月) 9:00～14:30	⑨ 講義・演習4 ⑩ 発表2 ⑪ 実践活動ガイダンス	○自身の地域での実践活動計画を作成 ○振り返り・個人のまとめ発表 ○実践活動実施上の留意点についてガイダンス ○探究のまとめの作成方法・提出方法についての説明	国立磐梯青少年交流の家



○参加者・概要

参加者：高校生(男子14名、女子7名) 計21名

内容：「ガイダンス・フィールドワーク」

「班別フィールドワーク・ポスターセッション」「活動計画作成・振り返り・ガイダンス」

概要：【ガイダンス・フィールドワーク】

スタッフによる概要説明を行い、猪苗代湖の環境を守る取り組みの体験として猪苗代湖岸のヒシ狩りやゴミ拾いを行った。その後、「地域を良くする」観点の整理をし、2日目に行うフィールドワークの計画を策定した。

【班別フィールドワーク・ポスターセッション】

3観点で班別フィールドワークを行った。午前はヒシの実(再利用)等について講師の方に講話をいただき、午後は白鳥丸(町おこし)・天鏡閣(観光)の視点で、各施設長から講話をいただいた。その後、「地域を良くする」ための有効な活動の検討を行い、ポスターセッションによる発表会を行った。

【活動計画作成・振り返り・ガイダンス】

自身の地域での実践活動計画を作成した。振り返りと個人のまとめをお互いに発表し合った。最後に、実践活動実施上の留意点についてガイダンスを行うとともに、探究のまとめの作成方法・提出方法についての説明を行い、今後行う実践活動や実践報告書作成につながるように工夫して実施した。

○成果と課題

<成果>

- ・ 自身の地域に生かすための「個人の行動計画」を作成し、発表した。自分の地元の課題に今回学んだことを生かして解決を図っていったが、どれもたくさんのアイデアに満ちあふれる素晴らしいものだった。

<課題>

- ・ オリエンテーション合宿で学んだ内容が実践活動につながるような内容にすべきであった。もっと具体例をあげながら、終了後のガイダンスを企画すべきであった。

(6) 地域ぐるみ事業

令和4年度 教育事業及び「SDGsを踏まえた
外国語を使った国際交流プログラム開発事業」
「イングリッシュキャンプ」



令和4年11月19日(土)～11月20日(日)
1泊2日

【場 所】 国立磐梯青少年交流の家

○主催

国立磐梯青少年交流の家

○事業趣旨

英語を用いたオリエンテーリングや調理活動、ニュースポーツといった体験活動を行うことにより、自然に異文化に触れながら英語に親しみをもち、英語を進んで用いようとする意欲を高める。



○活動日程

	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22			
11月19日 (土)	受付	開 会 式	アイ ス ブ レ イ ク	イングリッシュ オリエンテーリング	休 憩	ベ ッ ド メ イ ク	夕 食	移 動 ・ 準 備 ・ 消 毒	外 国 の お や つ 作 り	片 付 け ・ 移 動	入 浴	振 り 返 り	就 寝

	6	7	8	9	10	11	12				
11月20日 (日)		起 床 ・ 身 支 度	朝 の つ ど い	朝 食	移 動 ・ 片 付 け	部 屋 点 検	ニ ュ ー ス ポ ー ツ (モ ル ク)	休 憩 ・ ア ン ケ ー ト 記 入	閉 会 式		

○参加者・内容・概要

参加者：小学3年生（男子3名、女子4名） 小学4年生（男子4名、女子4名）
小学5年生（男子4名、女子3名） 小学6年生（男子3名、女子4名） 計29名

内 容：イングリッシュオリエンテーリング、外国のおやつ作り、ニュースポーツ（モルック）等

概 要：「イングリッシュオリエンテーリング」では、班ごとに20問の問題を探しながら解いた。難しい問題では、班の上級生やボランティア、職員がヒントを出すことでスムーズに活動を進めることができ、協力し合う姿が見られた。

「外国のおやつ作り」では、カナダの「ライスクリスピースクエア」とアメリカ合衆国の「バナナチョコフラッペ」を作った。「stir」「delicious」といった英語を参加者が理解して話すことができた。

「モルック」では、参加者が得点した際に職員やボランティアが「How many(points do you get)?」と尋ねると、参加者は倒したモルックのピンであるスキットルの数を英語で数えて「Seven!」等と答えることができた。また、応援する際に「Nice try!」「Good job!」といった英語を用いることができた。

○成果と課題

<成果>

- ・実施後のアンケートでイングリッシュキャンプ全体を「とてもよい」と答えた参加者は、90%以上だった。また、メインの活動となった「オリエンテーリング」「おやつ作り」「モルック」についても、同様の結果を得ることができた。
- ・休憩時に外国語指導助手が英語クイズなどを行い、スタッフ全員で英語に慣れ親しんだり、英語を自然に用いたりする環境を作ることができた。その結果、参加者が自然に英語を使うことができた。

<課題>

- ・実施後のアンケートでアイスブレイクを「とてもよい」と答えたのは70%程度にとどまり、「アイスブレイクの時間が短かった」との感想があった。他の事業でもアイスブレイクによって硬い表情が和むこともあり、十分な時間をアイスブレイクに充てていく必要があった。
- ・おやつ作りでフライパンを使用した際、参加者が熱くなったフライパンに触れそうになった。



○共催

株式会社リオン・ドールコーポレーション社会貢献室

○事業趣旨

(株)リオン・ドールコーポレーション(以下リオン・ドール)と共催で事業を企画・実施することにより、当所及びリオン・ドール職員の長所を活かした体験活動プログラムと地域の特色等の知見を深め、地域の教育力向上につなげるとともに、より効果的な体験活動を地域の子供たちに提供する機会とする。

○活動日程

	16	17	18	19	20
8月20日(土)	受付	開会式	野外炊飯 (薪割体験・焼きそばづくり)	望遠鏡作り	天体の話 閉会式



○参加者・内容・概要

参加者：未就学(男子2名、女子2名)小学生(男子3名、女子5名)計27名
高校生(男子0名、女子1名)大人(男性6名、女性8名)

内 容：薪割体験・野外炊飯・望遠鏡作り・天体の話

概 要：野外炊飯と天体観測のプログラムを展開する予定であったが、荒天のため天体観測を中止して天体の話に変更した。炊飯活動では薪割り、火おこし、調理の工程について、安全に配慮しながら子供が体験できるように運営した。後半は望遠鏡作りと職員による天体の話をを行い、子供たちに天体に関する興味を持たせ、家庭で天体観察ができるようにするためのきっかけ作りとした。



○成果と課題

<成果>

参加者からは「日頃野菜を食べない子供が自分で作った料理なのでちゃんと野菜を食べていた。」「薪を使った調理が初めてなので楽しめた。」「天体にまつわる話を聞いて、次回家族で自然での活動をするための参考となった。」「子供が進んで楽しみながら手伝いができた。」という感想があり、食生活への効果や非日常のプログラムでの感動、家庭での体験活動の推進、子供の自立心の向上などがうかがえた。

<課題>

荒天時での開催となり、天体観測のプログラムを変更しての事業運営となったが、ほぼ当初予定していた通りのスケジュールであったため、晴天時は時間が足りなくなる可能性が高かった。次回はスケジュールの計画・管理を入念に調整する必要がある。





○共催・後援・協賛・協力



協 賛：株式会社リオン・ドールコーポレーション
(昼食および飲み物のご提供)

協 力：株式会社 DMCaizu (猪苗代スキー場)
(活動場所のご提供)

○事業趣旨

昨今、物価・原油価格の高騰や感染症拡大などにより、各家庭では子どもに野外での体験活動を行う機会が減少している。そこで、手軽な費用で参加できる家族向け事業を企画し、子どもをもつ家族に自然体験の場を提供する。

○活動日程

10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00
10:00 集合	プチ登山（登り） 交流の家→猪苗代スキー場	昼食&レク	プチ登山（下山） 猪苗代スキー場→交流の家		15:00 解散

○参加者・内容・概要

参加者：園児（男子1名）
小学生（男子6名、女子7名）
保護者（男性6名、女性6名） 計26名

内 容：プチ登山

概 要：興味があったとしても実際に実行するためには安全管理などの理由からハードルが高いと考えられる登山をメインの活動とし、園児から大人までの初心者を対象とした日帰り事業を実施した。また、事業実施日を紅葉シーズンに設定することで、季節の移り変わりを体感できるようにした。



○成果と課題

<成果>

- ・本事業で従来利用されることが少なかった「交流の家コース」を使用したことで、新規の研修支援プログラムとして提供できることが実証された。
- ・紅葉シーズンに事業を実施したことで、参加者から「紅葉を見ながら運動不足を解消できました」や「景色が素晴らしい、紅葉もきれい」といった季節を感じたという感想を得ることができた。
- ・事前にコースや服装、持ち物などを詳細にまとめた資料を送付したことで、個人装備に問題がある参加者はいなかった。

<課題>

- ・登山道にハウノキの葉などが数多く落葉しており、急斜面では滑りやすかった。
- ・紅葉の度合いは年によって遅速があり事業実施日の設定が難しい。
- ・当初の予定では、行動中に木の実などの観察を計画していたが、クリやドングリはすでに落ちてしまっていたため、ネイチャーゲームなどの一部プログラムを変更しなければならなかった。



○協力

協 力：田圃クエスト

○事業趣旨

未就学児や児童を含む家族を対象に、かつて豊かな棚田が栄えた猪苗代の土地を開墾し、水路を復活させる活動を通して、自然の中で体を動かす楽しさを味わうとともに、磐梯山の豊かな自然がもたらす恩恵や生態系の変化、特徴を学び環境教育の深い学びへつなげる。また、天鏡閣の見学や地域の自然や人々とのふれあいを通して、豊かな感情や好奇心、思考力を培う。

第1回(令和4年5月22日)

○活動日程

	9	10	11	12	13	14	15	
5月22日 (日)		受付	はじまりの会	開墾クエスト 【休耕田を開墾】	昼食	休憩	手植えて田植え	終わりの会

○参加者・内容・概要

参加者：未就学児(男子3名、女子1名)
小学生(男子10名、女子8名)
大人(男子8名、女子9名)計39名

内 容：田圃クエストの始まりの話・休耕田の開墾・田植え

概 要： 田圃クエストのメンバーから、休耕田になることで多様な生態系が失われてしまうことや、休耕田再生活動の経緯について、参加者にフリップを使って説明があった。メンバーから休耕田に住んでいる水生昆虫やどじょう、野鳥や草花などの生き物について写真を使って説明していただいた。参加者はフリップを見て「この虫がいるの?」「きれいな鳥!」と、休耕田のある土地が豊かな自然が残る場所であることを理解した。

その後、参加者は草を集め、草がなくなった土地を鍬やスコップを使って耕し始めた。草が繁茂していた土地は根がびっしり張っていて、スコップで根を切りながら耕し始めた。参加者は草が一度生えると土を耕すことが困難になることを実際に体験して感じていた。

午後から家族ごとに田植えを行った。参加者は抵抗なく裸足で水田に入ることができ、他の参加者と隊列を組みながら手植えて、苗を植えることができた。あらかじめ田植えをする前に水田の水底に格子状に線を引いておいたので、未就学児でも目印を見つけて田植えをすることができた。



○成果と課題

<成果>

- 参加家族は休耕した土地を再び田畑に戻す大変さを体験することと、生き物を身近に観察したり素足で水田に入ったりすることなど、自然を直接肌で感じることができる体験活動の有用性を認識していた。
- 家族ごとに活動範囲を示したり、苗を植える列を指定したりした感染対策を講じた活動に、各家族とも満足度は高いものであった。子どもの自然体験不足による親子参加型の教育事業を望む声があった。

<課題>

- 農具を使うプログラムであったため、安全面の確保が重要であった。子どもが複数参加した家族にはスタッフが農具の指導を行い、保護者が兄妹のサポートを行う等、スタッフの人員配置と確保、活動範囲で管理できるような参加者の人数制限を行うことが必要になる。10家族以上または今回を大きく上回る人数を対象とする募集は、安全性を考慮すると困難であると考えられる。

第2回（令和4年8月7日）

	10	11	12	13	14	15
8月7日 (日)	受付	はじ まり の 会	開墾クエスト 【石取り・あぜ固め 水路開墾】	昼食 休憩	がさがさクエスト 【水路の生き物観察】	終 わ り の 会

○参加者・内容・概要

参加者：未就学児（男子2名、女子2名）

小学生（男子8名、女子7名）

大人（男子6名、女子6名）計31名

内 容：開墾クエスト（田んぼの石取り・あぜ固め・水路開墾）・がさがさクエスト

概 要： 午前中は第1回で作業した田んぼエリアの石取り作業・あぜを固める作業、水路開墾を行った。参加者はスコップを使って、重くて大きい石を家族で協力して掘り起こし、田んぼの水があふれないように土手の部分となる通称「あぜ」を踏んだり、スコップで叩いたり路面を固める作業を実施し、汗を流した。また、田んぼに水を供給するための水路を掘り、パイプを通したその後で通水式を行った。田んぼに水が入ると参加者からは歓声があがった。

午後は水路に入り、水生生物を調査する活動の通称「がさがさクエスト」を行った。子どもたちは網を水中に入れ、夢中で網を覗いていた。取れた生き物はガラスケースに入れて全員で観察した。豊かな水や土壌に恵まれた水路からは、アブラハヤやオニヤンマのヤゴ、ホトケドジョウ、サワガニなど準絶滅危惧種になっている生物がとれて、子どもたちは珍しい生き物を見つけるたびに歓声をあげていた。



○成果と課題

<成果>

- 参加者たちは開墾活動を通して第1回から作業した田んぼの変容に達成感を覚えることができました。また、がさがさクエストを通して日頃見ることのできない生物を発見できた感動と、豊かな水や土壌がかけがえのない恩恵を生むことを学ぶことができました。前回の反省点を活かし、職員の他大学生ボランティアを2名入れたことにより、作業効率・安全性が向上した。

<課題>

- 真夏の猛暑日に実施したプログラムであったため、こまめな水分補給や休憩等をはさんで活動を行うことで熱中症などの体調不良者は出なかったが、休憩する場所に木陰が少なく、参加者の体力の消耗が激しかった。今後は炎天下の対策についても万全にしていきたい。



第3回（令和4年10月2日）

	10	11	12	13	14	15	
10月2日 （日）	受付	はじ まり の 会	開墾クエスト 【開墾地の森の探検】	昼食	休憩	手刈りで稲刈り	終 わ り の 会

○参加者・内容・概要

参加者：未就学児（男子2名、女子2名）

小学生（男子7名、女子7名）

大人（男子6名、女子5名）計29名

内 容：田圃クエストによる森の探検（天鏡閣見学・周辺の森の散策）、稲刈り

概 要：参加者は午前中に天鏡閣見学と周辺の森の散策を行った。天鏡閣は開墾地の森の中心となる場所で、参加家族ごとに館内の見学を行った。天鏡閣のスタッフが制作したクイズで、館内の様々な場所にある展示物から答えを見つけていた。その後、田圃クエストの方に周辺の森の案内をしていただいた。日陰の地面でアリジゴクを探したり、ドングリを拾ったりした。森の中に住むムササビの巣のある木に案内された参加者は、指を指した方向を見て巣穴を探していた。また、開墾クエスト2回目に行った「がさがさクエスト」の場所に抜ける道を教えていただいて、草むらに棲むバッタやカマキリ等を捕まえることができ参加者は大喜びであった。

午後は春に田植えをした苗が黄金の稲穂となっている姿に参加者は歓声を上げていた。田圃クエストの方に安全な鎌の使い方を教えて頂き、稲を刈り取っていた。保護者と一緒に鎌を使って刈り取った稲を子どもたちは笑顔で運ぶ姿が見られ、充実した秋の日を過ごすことができた。

○成果と課題

<成果>

- 参加者たちは開墾活動や田植え、水路づくり、そして稲刈りとお米ができるまでに多くの労力がかかっていることを実体験で体験することができる貴重な体験となったようである。猪苗代の季節ごとの自然に触れて生き物が好きな子どもたちの笑顔をたくさん見ることができた。また、法人ボランティア（保育学科志望）の参加により、天鏡閣クイズでの合格スタンプの捺印や稲刈りの補助など、参加した未就学児の目線に立った対応ができた。

<課題>

- コロナ対策を意識するあまり、昼食の対応へ柔軟性を欠いてしまった。各家族はそれぞれの車中で昼食を食べていたが、折角の晴天の素晴らしい自然の中で食べるように促すことができれば、参加者の方々の笑顔がもっと溢れたのではないかと感じた。



令和4年度教育事業

「日本文化を楽しもう！」



【参加者】16家族45名

【場 所】国立磐梯青少年交流の家

○事業趣旨

茶道体験や昔遊びに挑戦したり、書道パフォーマンスを鑑賞したりすることで、日本の伝統文化に親しめるようにする。また、日本文化を題材に異年齢や異世代の交流活動を行う。

○活動日程

日程	テーマ	内容
1月21日(土) 9:00 受付	日本文化を体感しよう!	書道パフォーマンス、茶道体験、昔遊び 日本料理試食・絵本(日本昔話)読み聞かせ
1月22日(日) 11:50 解散	和楽器に親しもう!	和楽器演奏

○参加者・概要

参加者：16家族(小学生23名、保護者22名) 計45名

内 容：「書道パフォーマンス」「茶道体験」「昔遊び(コマ・けん玉・かるた・紙風船・ダルマ落とし)」「読み聞かせ(日本昔話)」「和楽器演奏」

概 要：【書道パフォーマンス】

会津学鳳高等学校書道部を講師として招き、書道パフォーマンスを鑑賞したり、書道部員と一緒に大筆で文字を書くパフォーマンス体験をしたりした。書道パフォーマンスでは音楽に合わせてダイナミックに文字を書く姿を間近で見、感動とともに書道の素晴らしさを体感できた。



【茶道体験】

裏千家・熊倉社中の皆様を講師として招き、茶道体験をした。家族でペアになって「お茶」をたてたり味わったりと、実際に茶道の一連の流れを体験することができた。



【読み聞かせ(日本昔話)】

絵本専門士の佐藤さんを講師として招き、いろいろな日本の昔話を聞く体験ができた。紙の絵本だけでなく、デジタル絵本の読み聞かせやお手玉を使った手遊び等も行われ、楽しく読み聞かせの時間を過ごすことができた。



【和楽器演奏】

山てらすの山本氏や廣光会の長尾氏を講師として招き、和太鼓や津軽三味線の演奏を聴いたり、体験したりすることができた。実際の演奏体験の際には、子供たちから「もっとやりたい。」「初めて触って感動した。」という声を多く聞くことができた。



○成果と課題

<成果>

- ・ 各分野の専門家を招いたことで、参加者がいろいろな日本文化に慣れ親しむことができた。鑑賞だけでなく、体験も取り入れたことで、参加者にとっても貴重で充実した時間となった。
- ・ 今回の事業で、多くの講師や団体と連携できたことにより、今後の教育事業における連携先はが増え、ネットワークを広げることができた。

<課題>

- ・ 冬の実施だったため、暖房をつけていたが寒いという声から参加者から聞かれた。快適に活動できるように次期など工夫していく必要がある。
- ・ 日本文化に関する体験を多く取り入れたが、各活動のつながりが薄かったので、ストーリー性を持たせる等して、事業全体を通して「日本文化のすばらしさ」を体感できるように工夫していきたい。

3 青少年教育指導者等の養成事業

(1) ボランティア養成・研修事業

令和4年度 教育事業

「ボランティアセミナー」



【期 日】令和4年5月7日(土)～5月8日(日)
1泊2日

【場 所】国立磐梯青少年交流の家

○共催・後援・協賛・協力

主催：国立磐梯青少年交流の家

○事業趣旨

○「ボランティア養成共通カリキュラム」に準拠したプログラムを実施することにより、教育事業や研修支援等の運営協力・指導補助などを担うことのできるボランティアを育成する。

○活動日程

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22			
5/7 (土)						受付	開 会 式	アイス ブレイク	屋 食	荷物 移動	屋 食	青少年教育に ついて知ろう!	休 憩	青少年 教育施設って どんなところ?	休 憩	野外炊飯	休 憩	ナイトハイク	入浴	就寝
5/8 (日)	起床 清掃	つ ど い	朝食	荷物 移動	安全管理Ⅱ	休 憩	法人ボランティア の 制度について	休 憩	磐梯の ボランティ ア活動	屋 食	休 憩	ボランティア活動の 意義	閉 会 式	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> □ …講義 □ …演習 □ …説明 </div>						

○参加者・内容・概要

参加者：43名（男子13名、女子30名）

内 容：青少年教育（講義） 野外炊飯 応急手当、ナイトハイク

概 要：

法人ボランティアとして活動するために必要となる安全管理（野外炊飯の危機管理、応急手当）や野外炊飯などの技術について学んだ。また、青少年教育について明治大学の吉松先生、ナイトハイクについて菅原先生からご指導をいただいた。当施設で活躍している先輩ボランティアにも参加していただき、昨年度の教育事業で実際に活動をしている様子を見たり、体験談や法人ボランティアとしての想いを聞いたりした。参加者はボランティア活動のイメージを具体的にし、これからボランティアとして活動していく上での目標を立てることができた。

○成果と課題

<成果>

- ・ 事後アンケートでは、法人ボランティアに必要な知識や技能を高めながら、ボランティアとしての意欲が高まったなどの記入が多く見られた。
- ・ 野外炊飯などを通して安全管理の仕方や野外炊飯の中での児童のつまづくポイントなどが理解できた。
- ・ 様々な活動の中で、グループワークの場面を多く設けた。参加者は自分の考えを伝えたり、みんなで考えたりすることができ、一方的な知識の詰め込みにならずに学びを深めることができた。

<課題>

- ・ 野外炊飯をあまり経験したことがない参加者が年々多くなってきていると感じる。安全管理などについてしっかり指導して、参加者に考えさせる必要がある。
- ・ 新型コロナウイルス感染症の拡大によって、高等学校や大学の対応に差が出てきている。予備日を設定し、受講希望の参加者が年度中にボランティアセミナーを受講できるようにしていく措置を考えていく必要がある。





○共催

茨城県水戸生涯学習センター

○事業趣旨

「ボランティア養成共通カリキュラム」に準拠したプログラムを実施することにより、教育事業や研修支援等の運営協力・指導補助などを担うことのできるボランティアを育成する。

○活動日程

8		9		10		11		12		13		14		15		16		17	
2022/7/3 (日)		受付	開 会 式	アイス ブレイク	青少年 教育	青少年 教育施設で どんなところ?		ボランティア 【テント設営】	昼食	ボラン ティア 活動の 意義		ボランティア活動の技術【読み聞かせ】				ボランティアの 制度について		閉 会 式	

○参加者・内容・概要

参加者：高校生（男子11名、女子11名）
 大学生（男子0名、女子5名）
 大人（男子2名、女子5名）計34名



内 容：ボランティア養成共通カリキュラムに準拠したプログラム

概 要： ボランティア養成共通カリキュラムに準じた磐梯青少年交流の家のプログラムを水戸生涯学習センターで行った。アイスブレイクでは、参加者は「バースデーチェーン」「言うこと一緒、やること一緒」などのメニューを実際に体験し、その後当施設の職員がアイスブレイクの意義やファシリテーターとしての心得などを解説した。講義では、青少年教育における発達段階に応じた課題と体験活動、参加者への関わり方等について説明するとともに、当施設のハード面や研修支援の様子を紹介動画で参加者に見ていただき、茨城県からの利用が多いことなどを解説した。参加者からは「磐梯山や猪苗代湖があり、素晴らしい環境だ。」「陸上部の練習も出来そう！」等との声が上がった。その後は天候が崩れたので室内の講義室で当施設で実際に利用している折り畳みテントを設営した。参加者は互いに声を掛け合ってテントを組み立てることができた。



午後は、当施設の職員が読み聞かせでの声の出し方や本の持ち方、会場の設営方法等について映像資料を交えながら解説した。その後、事前に対象年齢を幼児と設定しておいた絵本を使って、グループの参加者に向けて読み聞かせボランティア活動を体験していただいた。その後グループ内では、読み聞かせを聞いた参加者が読む役割の参加者へ、「本の持ち方は体の横がいいよ。」「声の出し方がいいね。」等のアドバイスをしていた。2回目の読み聞かせではアドバイス通りに行って、上達した読み聞かせを披露した。最後に参加者は法人ボランティアの登録制度についての説明を聞いた。

○成果と課題

<成果>

- 参加者はボランティア活動するにあたり、安全面や子供たちに対する心構えなどについて、実際に対応している職員から講話を聞いたことで、ボランティアに対する考え方を再認識でき、磐梯青少年交流の家以外でもセミナーを受講できた本講座の有用性を認識していた。
- 自然の中でのテント設営ができなかったが、野外での宿泊活動や防災活動でも必要になってくる技能なので、室内で実施できたことが有意義な活動だったとの感想がみられた。

<課題>

- 茨城県水戸生涯学習センターの3日間のボランティア養成講座の中で、最後の1日で当機構のボランティア養成共通カリキュラムに準拠したプログラムであったため、時間数の確保が重要であった。
- 法人ボランティア制度の知名度が浸透していない地域に対して、更なるアプローチが必要であると感じた。

4 東日本大震災復興支援プロジェクト

令和4年度 教育事業

「第8期 福島子ども未来塾1回目」



【期 日】令和4年6月25日(土)～6月26日(日)
1泊2日

【場 所】国立磐梯青少年交流の家

○共催・後援・協賛・協力

主 催：国立青少年教育振興機構

後 援：文部科学省、復興庁、福島県教育委員会

協 賛：公益財団法人東日本大震災復興支援財団

主 管：国立磐梯青少年交流の家

協 力：NPO 法人じぶん未来クラブ、一般財団法人 United Sports Foundation (五十音順にて表記)

○事業趣旨

- 東日本大震災で福島県や近県でどのようなことが起きていたかを調べ、震災を受けた人の気持ちを理解しながら、今、起こりうる災害に対する自助・共助・公助の精神を醸成する。
- 様々な学習・体験活動を通して、多面的・多角的な視点から自分のことを見つめ直し、未来への希望をもって行動できるようにする。
- 仲間と共に福島県の未来について考え、これから自分たちが福島県の復興を支えるために何ができるかを考え、広く発信する。
- 未来塾生（高校生・大学生）OB・OGをボランティアとして募集し、活動を通じて交流を深め、これまでの体験や経験を先輩塾生から学ぶ。

○福島子ども未来塾1回目のねらい

- 東日本大震災について学び、防災について考え、ふるさとである福島県に貢献しようとする意識を高める。
- 1年間を通して学ぶ仲間と協力して取り組むことの大切さを知る。

○活動日程

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
6/25 (土)						受付 第8期 福島子ども 未来塾 開塾式	移動 昼食	荷物 移動	ワークショップ	休憩	震災講話			野外炊飯(防災炊飯)		休憩	調べ学習 について	入浴	
6/26 (日)	起床 準備 片付け 洗濯	朝の つどい	朝食	避難点検 荷物移動	作文指導	防災ワークショップ	昼食	記念 撮影	まとめ 閉講式	解散									

○参加者・内容・概要

参加者：小学5・6年生（男子25名、女子23名）

中学1・2年生（男子6名、女子6名）

内 容：開塾式、防災教育（震災講話・防災ワークショップ・防災炊飯）

概 要：第8期の塾生同士の初顔合わせとなる1回目は、開塾式・防災炊飯・防災ワークショップなどの「減災・防災」プログラムを中心に活動した。1日目は日本と他国との避難所の違いや、東日本大震災の復興に向けた願いなどを学んだり、考えたりした。防災炊飯では空き缶ご飯とカレー作りをした。薪に火を付けることに苦戦したが、無事にカレーを作って食べることができた。2日目は、避難所を想定したクロスロードゲームを通じて意見の交換をした後に、身近な物で防災グッズ（スリッパ・雨具）を作った。



○成果と課題

<成果>

- ・アンケートで「東日本大震災について勉強はしたことがあるが、ここまで詳しく学習したことはなかった」と感想を書いた塾生がいた。防災について意識を高めるよいきっかけとなった。
- ・避難所を想定したクロスゲームでは、日常生活で起こりうる身近な課題ということもあり、一生懸命考える姿や塾生同士意見を交換する姿が多く見られた。
- ・防災炊飯、グループワーク等の活動を通して、協力しながら活動することでいいアイデアが出たり、目標に向かって最後までやり遂げることができたなどの感想を書いたりした塾生がいた。

<課題>

- ・塾生やボランティアスタッフの学生の中で缶切りなどを使ったことがない塾生が多くいた。現状把握の甘さから、大きく時間を経過してしまったり、ケガにつながりそうなヒヤッとした場面があったりした。計画する段階で、できて当たり前という概念を捨てて、時間に余裕をもった指導計画を作成することの重要性を感じた。

事業報告

令和4年度 教育事業

「第8期 福島子ども未来塾2回目」



【期 日】 令和4年7月16日(土)～18日(日)
2泊3日

【場 所】 国立磐梯青少年交流の家

○共催・後援・協賛・協力

- 共 催：国立磐梯青少年交流の家
- 後 援：文部科学省、復興庁、福島県教育委員会
- 協 賛：公益財団法人東日本大震災復興支援財団
- 主 管：国立磐梯青少年交流の家
- 協 力：NPO法人じぶん未来クラブ

○事業趣旨

- ワークショップを通して、自分や仲間のことをより深く知る。
- ダンスの自己を表現する力を高めよう
- 様々な学習・体験活動を通して、多面的・多角的な視点から自分のことを見つめ直し、未来への希望をもって行動できるようにする。
- 仲間と共に福島県の未来について考え、これから自分たちが福島県の復興を支えるために何ができるかを考え、広く発信する。
- 未来塾生（高校生・大学生）OBOG をボランティアとして募集し、活動を通じて交流を深め、これまでの体験や経験を先輩塾生から学ぶ。

○福島子ども未来塾2回目のねらい

- ①心を開いて、表現する楽しみを学ぶ。
- ②楽しいことにチャレンジする喜びを学ぶ。
- ③チームで1つのことを成し遂げる喜びを知る。

○活動日程

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
7/16(土)						受付	Meet	昼食	休憩	グループワークにチャレンジ	Meet&Greet ワークショップ&ゲーム	夕食	休憩	振り返り 連絡	荷物 移動	休憩	入浴	消灯
7/17(日)		朝食	準備	Meet&Greet ワークショップ			休憩	昼食	準備	Show	振り返り	夕食	休憩	調べ学習つ てどうい う風に進める のか。		休憩	入浴	消灯
9/25(日)		朝食	準備	チャレンジ宣言		仲間のいい 所を伝え合 おう	昼食	準備	Meet									

○参加者・内容・概要

参加者：小学5・6年生（男子25名、女子23名）
 中学1・2年生（男子4名、女子6名）
 内容：自己を表現する力を高めるためのダンスプログラム

概 要： 子供達は、恥ずかしさや不安から緊張の表情の子が多かった。じぶん未来クラブの皆さんの簡単なゲーム、フラッグづくりを通して子供たちの表情がほぐれた。「HEART Global」のキャストとの出会いやゲーム、ダンスなどを通して笑顔いっぱいに取り組む子供達の姿が多く見られた。今回のHEART Globalの歌やダンスのチャレンジを通して、成功した経験、仲間意識が強くなった。振り返りを通して、次の未来塾までチャレンジしたいことを考え、「本気を出していきたい」、「諦めないこと」、「進んで発表していく」、「お手伝いをしていきたい」など様々なチャレンジすることが聞けた。様々な事にチャレンジして成長するきっかけとなるものを多く得ることができた。



○成果と課題

<成果>

- ・表現ゲームやダンスのワークショップを通して、キャストのすごさや伝える楽しさを実感した、「Show」に向け緊張しながらも何度も練習したことで、「やり遂げて自信がついた」と振り返る子供が多かった。
- ・ダンスプログラムを通してチャレンジする大切さを学び、日々の生活でもチャレンジすることを決め、仲間に伝えることができた。
- ・仲間との関りが多く、仲間同士でいい所見つけ、多く伝える姿が見られた。

<課題>

- ・プログラム全体の振り返りをじぶん未来クラブにやっていただきたかったが、出来なかったのでスタッフが対応した。





○共催・後援・協賛・協力

- 共 催：国立磐梯青少年交流の家
- 後 援：文部科学省、復興庁、福島県教育委員会
- 協 賛：公益財団法人東日本大震災復興支援財団
- 主 管：国立磐梯青少年交流の家
- 協 力：一般財団法人 United Sports Foundation

○事業趣旨

- 東日本大震災で福島県や近県でどのようなことが起きていたかを調べ、震災を受けた人の気持ちを理解しながら、今、起こりうる災害に対する自助・共助・公助の精神を醸成する。
- 様々な学習・体験活動を通して、多面的・多角的な視点から自分のことを見つめ直し、未来への希望をもって行動できるようにする。
- 仲間と共に福島県の未来について考え、これから自分たちが福島県の復興を支えるために何ができるかを考え、広く発信する。
- 未来塾生（高校生・大学生）OB・OG をボランティアとして募集し、活動を通じて交流を深め、これまでの体験や経験を先輩塾生から学ぶ。

○福島子ども未来塾3回目のねらい

- ①様々なスポーツに触れ、その楽しさを実感する。
- ②様々なスポーツを通して、ルールを守ることや仲間と協力する大切さに気付く。
- ③チームメイトを応援したり、サポートしたりする喜びを実感する。

○活動日程

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23		
9/23 (金)						受付	開式	セレモニー	昼食	休憩	クリニック① A:eスポーツ B:サッカー	クリニック② A: サッカー B:eスポーツ	振り返り	夕食	ユニホーム づくり	連絡	休憩	入浴	消灯	
9/24 (土)			朝の挨拶	朝食	準備	目標決 め	クリニック③ 陸上競技	準備	朝食	休憩	クリニック④ A:セパタクロ ー B:モルック	クリニック⑤ A:モルック B:セパタクロ ー	振り返り	夕食	ユニホーム づくり	連絡		入浴	消灯	
9/25 (日)			朝の挨拶	朝食	準備	入場券 ①サッカー ②フリー	表彰 式	表彰 式	準備	閉会式										

○参加者・内容・概要

参加者：小学5・6年生（男子23名、女子20名）
中学1・2年生（男子4名、女子4名）

内 容：スポーツにチャレンジ！

概 要：第3回は、United Sports Foundationによるスポーツワークショップでした。1日目は、サッカーとeスポーツ、ユニフォームづくりを、2日目は陸上競技（ランニング）、モルック、セパタクローを、3日目はスポーツ大会を行った。子供たちは、どのワークショップでも、一生懸命チャレンジする姿、笑顔が多く見られた。ふりかえりでは、ワークショップで経験したことを踏まえて、次の目標を設定した。

閉会式では、「サッカーで失敗したことでその後、消極的になってしまったので、恐れずに前に出る」、「失敗などした子に、「大丈夫」などの言葉をかけることができた。」など自分の成長を実感できることが内容の感想を聞くことができ、協力すること、目標に向かうことの大切さやスポーツの楽しさを改めて感じる事ができた。



○成果と課題

<成果>

- ・初めてチャレンジするスポーツや自分の目標に向かって一生懸命取り組む塾生の姿が多く見られた。今まで走ることに苦手意識があった子が、自分の走りが変わったと実感し、笑顔いっぱい振り返り時に伝えてくれた。
- ・モルックやセパタクローなどのスポーツの楽しさを実感することができた。
- ・ユニホーム作りやスポーツ大会のチーム応援を決める活動を通して、仲間への想いが深まり楽しく活動する姿が多く見られた。

<課題>

- ・eスポーツを体験する良い機会になったが、世界にチャレンジする生き方などの話がもう少し詳しく聞きたかった。家で行うゲームとあまり違いがないように感じた。

事業報告

令和4年度 教育事業

「第8期 福島子ども未来塾4回目」



【期 日】令和4年10月8日(土)～10日(月)
2泊3日

【場 所】岩手県大船渡市、宮城県仙台市
福島県南相馬市、浪江町、双葉町

○共催・後援・協賛・協力

- 共 催：国立磐梯青少年交流の家
- 後 援：文部科学省、復興庁、福島県教育委員会
- 協 賛：公益財団法人東日本大震災復興支援財団
- 主 管：国立磐梯青少年交流の家
- 協 力：あすびと福島、大船渡津波伝承館（大船渡市魚市場）、震災遺構仙台市立荒浜小学校、
双葉町産業交流センター、震災遺構浪江町立請戸小学校、大平山霊園、棚塩産業団地

○事業趣旨

- 東日本大震災で福島県や近県でどのようなことが起きていたかを調べ、震災を受けた人の気持ちを理解しながら、今、起こりうる災害に対する自助・共助・公助の精神を醸成する。
- 様々な学習・体験活動を通して、多面的・多角的な視点から自分のことを見つめ直し、未来への希望をもって行動できるようにする。
- 仲間と共に福島県の未来について考え、これから自分たちが福島県の復興を支えるために何ができるかを考え、広く発信する。
- 未来塾生（高校生・大学生）OB・OGをボランティアとして募集し、活動を通じて交流を深め、これまでの体験や経験を先輩塾生から学ぶ。

○福島子ども未来塾4回目のねらい

- 東日本大震災が私たちの生活に与えた影響を知る。
- 東日本大震災からの復興の状況を体感する。
- 復興の先の「創造」につながる現在の状況について知り、自分や福島の未来について考える。

○活動日程

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
10/8 (土)						受付	開講式	移動		大船渡プログラム		移動		入館式 荷物搬入 準備	夕食	入浴	ミーティ ング	就寝準備	
10/9 (日)		起床 朝食	出発準備 荷物搬出 退館式	移動	震災遺構 仙台市荒浜地区住宅基礎 震災遺構仙台市立荒浜小学校 見学	移動	昼食		浪江プログラム	移動	道の駅 なみえ 見学	移動	入村式 荷物搬入 準備	夕食	準備	入浴	準備	ミーティ ング	就寝準備
10/10 (月)		起床 準備	朝食	出発準備 荷物搬出 退村式	移動	あすびと福島プログラム	昼食	休憩	閉講式										

○参加者・内容・概要

参加者：小学5・6年生（男子23名、女子20名）
中学1・2年生（男子5名、女子5名）

内 容：東日本大震災を知る、震災遺構をめぐる、復興の状況を知る

概 要：

第4回は、「震災・復興・創造・未来」をテーマに、岩手県、宮城県、福島県の東日本大震災による影響や復興の状況を、実際に現地に行き、見たり、聞いたりした。岩手県では、大船渡市を訪れ、津波による被害について、紙芝居と映像を使っでの講話を聞いた。宮城県では、仙台市の震災遺構を訪れ、実際の被害の状況を見ながら、解説を聞いた。福島県では、浪江町を訪れ、未来に向けて新たに創造している地域の状況を見た。子どもたちは、これまで話を聞いたり、写真や映像を見たりしただけだったので、実際の様子を見たことで、学びをより深めることができた。



○成果と課題

<成果>

- ・実際に現地に行くことで、より具体的に東日本大震災の影響や復興の状況を知ることができた。
- ・これまで知識でしかなかった震災や復興が、実際の状況に触れたことで経験として身につけ、より深い学びとなった。
- ・将来の自分がどのような姿になりたいか、未来の福島県がどのようなになればよいかなどを、自分の言葉で表現することができた。

<課題>

- ・バス移動の時間が長くなり、また、地域の行事などにより道が混んだりしたことで、計画が大幅にずれてしまった。

事業報告

令和4年度 教育事業

「第8期 福島子ども未来塾5回目」



【期 日】令和4年12月10日(土)～11日(日)
1泊2日

【場 所】国立磐梯青少年交流の家

○共催・後援・協賛・協力

共 催：国立磐梯青少年交流の家

後 援：文部科学省、復興庁、福島県教育委員会

協 賛：公益財団法人東日本大震災復興支援財団、株式会社リオン・ドールコーポレーション

主 管：国立磐梯青少年交流の家

協 力：日本赤十字社福島県支部、アルファ電子株式会社、猪苗代青年会議所、猪苗代町の皆様

○事業趣旨

- 東日本大震災で福島県や近県でどのようなことが起きていたかを調べ、震災を受けた人の気持ちを理解しながら、今、起こりうる災害に対する自助・共助・公助の精神を醸成する。
- 様々な学習・体験活動を通して、多面的・多角的な視点から自分のことを見つめ直し、未来への希望をもって行動できるようにする。
- 仲間と共に福島県の未来について考え、これから自分たちが福島県の復興を支えるために何ができるかを考え、広く発信する。
- 未来塾生（高校生・大学生）OB・OGをボランティアとして募集し、活動を通じて交流を深め、これまでの体験や経験を先輩塾生から学ぶ。

○福島子ども未来塾5回目のねらい

- これまでの学習で学んだことを生かして、防災についてより深く考える。
- 応急手当や防災の講義・実習を通して、自分や家族、仲間を生かす手段を身につけ、日頃から必要な準備を知る。
- 地元福島県に根ざし、夢をもって頑張っている方の話を聞き、今、自分ができることを考え、実践する。

○活動日程

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
12/10 (土)						受付	開講式	【講義・実習】(昼食含む) 災害時炊き出し体験 応急手当 災害時シミュレーション				休憩	【講話・実習】 (夕食含む) 夢を語る①	検温 休憩	【講話・実習】 夢を語る②	荷物 搬入 準備 等	入浴	就寝 準備	
12/11 (日)	起床 準備	朝食	部屋点検 移動		プレ発表会	休憩 移動	作文作成	昼食	開講式										

○参加者・内容・概要

参加者：小学5・6年生（男子21名、女子18名）

中学1・2年生（男子5名、女子5名）

内 容：災害時炊き出し、応急手当、災害時シミュレーション、
講話・実習（夢を語る）、プレ発表会

概 要：

第5回は、「防災・減災」「夢と未来」をテーマに、OB・OGとともに活動を行った。「防災・減災」では、災害時における生活面の行動について、実習を通して学んだ。子どもたちは、1人でできることは少ないが、多くの仲間と協力することで解決できることが多いということを実感した。「夢と未来」では、地元福島県を元気ある場所にしようと活動している方々から講話をしていただき、子どもたちは自分たちに何ができるかを考えることができた。



○成果と課題

<成果>

- ・災害時に、自分がどのような行動をとればよいか具体的なわかったり、仲間とコミュニケーションをとることの大切さを改めて知ったりできた。
- ・食事を自分たちでつくすることで、食物の大切さに気づき、体験することがより一層大事であるとわかった。
- ・「夢と未来」の講話を聴き、地元福島県の将来の姿を想像し、より具体的に考えや意見を出すことができた。

<課題>

- ・OB・OGの立ち位置の明確化、意識づけが必要だと感じた。現段階では、そのための時間を確保することが難しく、方法を模索しているところである。
- ・発表会資料の事前指導が十分とは言えないので、子どもたちや保護者とのこまめなやり取りをできるような仕組みづくりを行いたい。

事業報告

令和4年度 教育事業

「第8期 福島子ども未来塾6回目」



【期 日】令和5年2月4日(土)～5日(日)

1泊2日

【場 所】国立磐梯青少年交流の家

○共催・後援・協賛・協力

- 共 催：国立磐梯青少年交流の家
- 後 援：文部科学省、復興庁、福島県教育委員会
- 協 賛：公益財団法人東日本大震災復興支援財団
- 主 管：国立磐梯青少年交流の家
- 協 力：有限会社 山形屋本店

○事業趣旨

- 東日本大震災で福島県や近県でどのようなことが起きていたかを調べ、震災を受けた人の気持ちを理解しながら、今、起こりうる災害に対する自助・共助・公助の精神を醸成する。
- 様々な学習・体験活動を通して、多面的・多角的な視点から自分のことを見つめ直し、未来への希望をもって行動できるようにする。
- 仲間と共に福島県の未来について考え、これから自分たちが福島県の復興を支えるために何ができるかを考え、広く発信する。
- 未来塾生（高校生・大学生）OB・OGをボランティアとして募集し、活動を通じて交流を深め、これまでの体験や経験を先輩塾生から学ぶ。

○福島子ども未来塾6回目のねらい

- 1年間で学んだことをまとめ、自分の言葉で伝える。
- 冬ならではの活動を通して、安全面を確認しつつ、精一杯楽しむ。
- 福島県がもつ伝統工芸に触れ、その良さを再発見する。

○活動日程

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23		
2/4 (土)						受付	開講式 諸連絡	昼食	準備 移動	雪上安全講習 雪上活動	片づけ 移動	創作活動	修了制作	片づけ 移動	夕食	休憩 移動	閉塾式 リハーサル	入浴 準備	入浴	就寝 準備
2/5 (日)		起床 準備	朝食	部屋点検 移動	発表会 準備・練習	発表会	閉塾式の 発表練習	昼食	準備 移動	閉塾式	最後の あいさつ									

○参加者・内容・概要

参加者：小学5・6年生（男子17名、女子20名）
 中学1・2年生（男子3名、女子5名）
 内 容：雪上安全講習・雪上活動、創作活動（会津絵ろうそく）、
 調べ学習発表会、閉塾式

概 要：

第6回は、「冬季の安全確保」「1年間のまとめ」をテーマに活動を行った。「冬季の安全確保」では、春夏秋と比較した気候の違いや雪上を中心とした安全な活動のしかたを学び、実際に外に出て雪遊びを行うことで学びを深めた。「1年間のまとめ」として、調べ学習発表会、閉塾式を行った。塾生が興味を持ったことを調べ、発表した。まとめ方や発表の仕方などそれぞれ工夫がされており、みんなが集中して取り組むことができた。閉塾式では、1年間のまとめにふさわしい返事、態度で終えることができた。



○成果と課題

<成果>

- ・雪国とはいえ、雪があまり降らない地域からの参加者が多いので、雪上活動はプログラムとして必要であることがわかった。
- ・創作活動として、福島県の伝統工芸品を紹介しながら、簡単な体験も入れたことで、子どもたちも受け入れやすいと感じた。
- ・調べ学習発表会では、前回、事前に発表会練習を行い、多くの人から助言をもらったことで、子どもたちがより良い資料を作成し、より良い発表ができた。

<課題>

- ・雪上活動で、事前に安全面などを現地踏査を通して確認したが、自然ということもあり、活動中に状況が変わってしまい、危険を感じる場面があった。
- ・閉塾式に向けての準備をもっと時間を確保して丁寧に行ってあげたい。子どもたち、保護者にとっても晴れ舞台であるので、最後まで格好いい姿を見せたい。

5 会津・山形「体験の風をおこそう」運動実行委員会事業

○事業目的

「体験の風おこそう」運動の普及啓発のために、福島県内及び山形県内の多くの子供たちに体験活動の楽しさを提供するとともに、保護者に体験活動の必要性や重要性を発信する。

(1) 第6回いなわしろフェスティバル（詳細はP. 27参照）

(2) 子どもの生活リズム向上山形県フォーラム

① 内容

- ・記念講演「家族みんなで見直そう
わが家のルールと生活リズム」
東北大学加齢医学研究所脳科学部門
認知行動脳科学研究分野及び大学院
情報科学研究科 准教授 細田 千尋 氏

② 期日・場所

- ・令和4年11月12日（土）山形市「遊楽館ホール」

※山形県では、他にも「庄内地区スキルアップ講座」等、ボランティアの育成に係る事業も実施した。



山形県フォーラムちらし

(3) 地域イベントや他施設での「体験の風をおこそう」運動普及啓発活動

① 事業目的

「体験の風をおこそう」運動の普及啓発のために、地域のイベントに積極的に出展を行い、体験活動の重要性について広く発信をしていく。

② 期日 イベント名【場所・人数】

- ・令和4年5月22日（日）磐梯山開き
【猪苗代登山口 70人】
- ・令和4年6月26日（日）猪苗代マラソン大会
【猪苗代町運動公園 300人】
- ・令和4年7月18日（月）学びいな夏祭り
【猪苗代町運動公園 248人】
- ・令和4年7月31日（日）磐梯まつり
【猪苗代町運動公園 687人】
- ・令和4年10月16日（日）猪苗代ノルディック
ウォーク【本所ふれあい広場 111人】
- ・令和4年11月12日（土）いなわしろ新そば祭り【道の駅いなわしろ 236人】
- ・令和5年1月10日（月）十日市【会津若松市野口青春通り 680人】
- ・令和5年1月13日（木）十三日市【猪苗代町中央商店街通り 318人】
- ・令和5年2月18日（土）裏磐梯雪まつり【裏磐梯サイトステーション 188人】



磐梯山開き（R4.5.22）

③ 成果

昨年度と比べるとイベントの中止も少なくなっており、可能な限り体験の普及啓発活動を実施した。コロナ禍でも子供たちや保護者、地域の方々に体験の機会を提供したことにより、あらためて体験活動の楽しさや重要性を実感していただくとともに、地域力向上の推進に努めることができた。

(4) 地域の学童クラブ等への出前講座

① 内容

学童クラブ等へ出前事業として缶バッジ作製やこども体験遊びリンピックの体験プログラムの提供、ニュースポーツの指導等を行った。

② 期日・会場・参加人数

・令和4年6月10日(金)	駒形児童クラブ	136人
・令和4年6月20日(月)	吾妻小学校放課後子ども教室	29人
・令和4年6月30日(木)	姥堂児童クラブ	61人
・令和4年7月5日(火)	松長第二こどもクラブ	80人
・令和4年7月15日(金)	猪苗代児童クラブ	120人
・令和4年7月5日(火)	松長第二こどもクラブ	80人
・令和4年7月21日(木)	塩川児童クラブ	167人
・令和4年7月21日(木)	磐梯町児童館	165人
・令和4年7月22日(金)	上三宮児童クラブ館	40人
・令和4年7月22日(金)	慶徳児童クラブ館	95人
・令和4年7月26日(火)	岩月児童クラブ館	25人
・令和4年7月26日(火)	喜多方市中央児童館	185人
・令和4年7月30日(土)	やまと児童クラブ	60人
・令和4年8月5日(金)	千里児童クラブ	33人
・令和4年8月8日(月)	日新こどもクラブ	133人
・令和4年9月3日(土)	行仁こどもクラブ	120人
・令和4年9月8日(木)	湊こどもクラブ	72人
・令和4年10月17日(月)	門田こどもクラブ	147人
・令和4年10月19日(水)	永和こどもクラブ	101人
・令和4年10月24日(月)	豊川児童クラブ	84人
・令和4年11月5日(土)	翁島児童クラブ	52人
・令和4年12月26日(月)	河東こどもクラブ	106人
・令和5年12月23日(金)	千里児童クラブ	23人

③ 成果

子供たちが興味をもって楽しむことができる体験活動の提供をすることで、体験活動の推進及び実行委員会の周知に効果があった。

(5) 「早寝早起き朝ごはん」国民運動普及啓発キャラバン

① 事業目的

子供の基本的な生活習慣の確立や生活リズムの向上につながる「早寝早起き朝ごはん」国民運動を積極的に展開することにより、子供たちの「よく体をうごかし、よく食べ、よく眠る」という当たり前で必要不可欠な生活習慣を保護者や子供、社会全体に普及啓発をしていく。

② 期日・会場・参加人数

・令和4年11月1日(火)	西会津こゆりこども園	85人
・令和4年12月2日(金)	北塩原村さくら幼稚園	28人
・令和4年12月6日(火)	会津若松市広田保育所	100人
・令和4年12月9日(金)	磐梯幼稚園	21人
・令和4年12月13日(火)	猪苗代さくらこども園	44人
・令和5年1月17日(月)	裏磐梯幼稚園	12人
・令和5年1月19日(木)	猪苗代ひまわりこども園	156人
・令和5年1月24日(火)	猪苗代こども園	47人

③ 成果

本所周辺の磐梯町、猪苗代町、北塩原村の幼稚園やこども園、保育所に募集案内を配付するとともに、ホームページで広報したところ、上記8ヶ所で「早寝早起き朝ごはん」国民運動を実施することができた。

今年度はコロナ感染対策を講じながら、絵本「よふかしおにとはやねちゃん」の紙芝居での読み聞かせ、早寝早起き朝ごはん体操、記念写真撮影の提供をした。参加した子供たちや職員の方々に「早寝早起き朝ごはん」の大切さを普及啓発することができた。



(6) 子どもゆめ基金説明会

① 事業目的

より多くの方々や青少年団体などに、子どもゆめ基金の趣旨を理解していただくとともに、申請の流れや申請書の書き方などの実務について知識を深めていただく。

② 期日・場所

- ・令和4年9月10日(土) 吾妻学習センター
 - ・令和4年9月11日(日) 茨城県日立市役所
 - ・令和4年11月12日(土) 山形市「遊楽館ホール」
- ※山形県フォーラムにおいて



ゆめ基金説明会 (R4.9.11)

(7) その他

① 猪苗代湖の自然を守る会との連携

○地元小学校の総合学習支援

- ・令和4年5月31日(火) 翁島小学校「湖面の植物についての講話」
- ・令和4年6月3日(金) 翁島小学校「川の水質調査1」四ヶ村堀・高橋川
- ・令和4年6月10日(金) 翁島小学校「猪苗代湖清掃」
- ・令和4年6月14日(火) 翁島小学校「アサザの移植」
- ・令和4年6月17日(金) 翁島小学校「ヒシ回収活動」
- ・令和4年6月27日(月) 翁島小学校「川の水質調査2」硫黄川・高森川
- ・令和4年9月5日(月) 翁島小学校「アサザの移植」
- ・令和4年9月13日(金) 翁島小学校「ヒシ回収活動」
- ・令和4年9月27日(火) 翁島小学校「アサザ種取り」
- ・令和4年9月30日(金) 翁島小学校「湖岸のヨシ刈り」
- ・令和4年11月21日(月) 翁島小学校「湖の水質調査」



川の水質調査
(R4. 6. 27)

○猪苗代クリーンアクション2022の参加【計2回】

- ・令和4年4月23日(土)
- ・令和4年6月25日(土)

○ヒシ刈ボランティアとしての協力【計6回】

- ・令和4年8月5日(金)
- ・令和4年8月12日(金)
- ・令和4年8月26日(金)
- ・令和4年9月2日(金)
- ・令和4年9月9日(金)
- ・令和4年9月16日(金)

② 「体験の風をおこそう」スタンプラリー

国立磐梯青少年交流の家、国立磐梯那須甲子青少年自然の家、福島県会津自然の家、福島県郡山自然の家、いわき海浜自然の家の利用について継続的に利用している方に記念品を贈呈し、「体験の風をおこそう」運動の啓発を図ってきた。

③ 「体験の風をおこそう」カレンダー

国立磐梯青少年交流の家を中心に、会津・山形「体験の風をおこそう」運動実行委員会の構成団体で、「体験の風をおこそうカレンダー2023」を作成した。カレンダーの内容は各団体や施設の特色を紹介した内容にして、各構成団体を通して幅広く配布し、「体験の風をおこそう」運動の普及啓発を図った。